

水稲糯品種「カグヤモチ」の栽培法

(農試県北分場・技術部・環境部)

1 背景とねらい

「カグヤモチ」(旧系統名 ふ系糯147号)は、平成元年度に、高標高地を除く県中北部を適応地帯とし、「わせとらもち」を対象品種として準奨励品種に採用された。本品種は、多収性を有し、品質・もち質に優れ、また耐冷性も強く安定していることから、「わせとらもち」に替わって栽培面積の拡大が期待され、平成3年度から本格的な普及に移る。

こうしたことから、これまでに得られた知見をもとに、施肥法と刈取時期を中心に良質糯米安定栽培のための栽培法についてとりまとめたので参考に供する。

2 技術の内容

(1) 収量水準600kg/10aを得るための期待生育量

稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	m ² 当り粒数 (粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)
72~ 77	430~ 480	77~ 85	34,000~ 39,000	20.5 以上	80~ 90

(2) 施肥法

ア 基肥

基肥窒素量は「たかねみのり」(「わせとらもち」)並の6~8kg/10aとする。(地帯別・土壌別施肥量はたかねみのりの施肥基準に準ずる。)

イ 追肥

追肥時期	分けつ期	穂首分化期	幼穂形成期	減数分裂期	○ 重点 △ 地域性 × 回避
効 果	△	×	○	△	

(ア)「わせとらもち」より一穂粒数が少ない品種であり、一穂粒数が不足するとm²当り粒数を十分確保できないので、幼穂形成期追肥(窒素成分量2kg/10a程度)を重点として、粒数の確保を図る。ただし、生育状況によっては減数分裂期に追肥時期を変更する。

幼穂形成期追肥、減数分裂期追肥の2回追肥は、品質の低下と登熟の遅延を招く危険があるので避ける。

(イ) 分けつ期追肥は「たかねみのり」に通常施用している地域で施用する。

(ウ) 穂首分化期追肥は長稈化や過繁茂につながり、倒伏や品質低下を招くので避ける。

(3) 刈取時期

ア 登熟速度は「わせとらもち」よりやや早く、登熟積算温度（平均気温）による刈取適期は950～1,050℃の範囲である。登熟期間が多照に経過すると、登熟が早まり登熟積算気温950℃以前から刈取適期となるので、判定に当たっては黄化秬割合80%程度、枝梗黄化割合70%程度を刈取指標とする。

イ 刈遅れによる品質低下は「わせとらもち」よりやや少ない方だが、登熟積算温度が1,100℃を越えると被害粒（特に茶米）の発生が多くなり品質が低下するので、適期刈取に努める。

3 指導上の留意事項

(1) 一穂秬数がやや少なく、秬数がとれがたい欠点があるので、植付本数は1株当たり4本程度とし、栽植密度を落とさず㎡当たり22～25株（坪当たり70～80株）程度は確保し、初期水管理に留意して、早期に茎数を取り穂数確保を図る。

(2) 多肥条件では、穂数・秬数が増加して多収傾向となるが、千粒重・登熟歩合が低下し、品質もやや劣るので、極端な多肥栽培は避ける。

(3) 栄養診断基準については、今後検討することとしているが、不良気象等による出穂遅延が懸念される場合や幼穂形成期における葉色低下が見られない場合は、追肥時期を減数分裂期に変更する。

(4) 出穂期前後から下葉枯れが多くなるので、未熟堆肥の多用、生わらすき込みの水田や強湿田では中干し等の水管理に留意する。

(5) 穂発芽しやすい品種であるので、倒伏させないように注意するとともに、降雨の多い年は早めに刈取を行い品質確保に努める。